四季の漢詩　夏の部

1　飲湖上初晴後雨

湖上に飲す、初めは晴れて後に雨ふる　　蘇　軾

水光瀲灩晴方好
山色空濛雨亦奇
欲把西湖比西子
淡粧濃抹總相宜

水光 瀲灩として晴れて方に好し
山色 空濛として雨も亦た奇なり
西湖を把って西子に比せんと欲すれば
淡粧 濃抹総べて相宜し

【通釈】

起句　湖面を照らす日の光がきらきらとさざ波に映じ、晴れた日の湖の景色は実にすばらしい。
承句　周辺の山々の色がぼんやりとかすんで見える、雨の中の景色もまたすばらしい。
転句　この西湖の景色の美しさは、たとえるならば、かの絶世の美女西施が、
結句　さっと薄化粧をした時も、またこってりと厚化粧をこらした時も、どちらもすばらしかったのと同じだ。

【語釈】

◉飲…のむ、さかもり・うたげの意味をもつ。◉水光…水面の光。◉瀲灩…さざ波の連り動くさま。水面が光に映じてきらめくさま。◉山色…山の色。山の景色。◉空濛…、小雨が降ってうすぐらいさま。ぼんやりかすんではっきりしないさま。◉奇…めずらしい。すぐれている。◉西湖…浙江省杭州城外にある湖。風光明媚で有名。◉西子…西施。春秋時代越国に生れた絶世の美女。越王勾践が呉に敗れ和を請うた時、呉王夫差に贈られその愛妃となり、呉国滅亡のもととなった。◉淡粧…薄化粧。◉濃抹…厚化粧。こってり塗る意。

【押韻】上平声 四支韻　　奇、宜　起句は踏み落とし。

七言絶句は、通常起句も押韻するが、此の詩のように、起句 承句を対句構成とした場合、踏み落とすことがある。

【解説】

天下の絶景西湖の風景を、杭州ゆかりの美女西施にたとえて美しく詠じた絶品です。

蘇軾(一〇三六―一一一〇)は北宋最高の詩人であり大文豪。東坡と号した。眉山県(今の四川省)に生れ、二十二歳で科挙進士及第。高級官僚の道を歩んだが、後年王安石一派の政策を批判して度びたび左遷された。三十六歳の時通判(副知事)として杭州に赴任、三年間この地で過ごした。その間西湖の景色を愛し、多くの詩を遺した。この詩はその代表的な作品の一つです。なお、松尾芭蕉の象潟の句に、この詩の影響が見てとれます。

2　江村即事

釣罷歸來不繫船
江村月落正堪眠
縱然一夜風吹去
只在蘆花淺水邊

江村即事　　司空　曙
釣りを罷め帰り来たって船を繋がず
江村　月落ちて正に眠むるに堪えたり
縱然　一夜　風吹き去るとも
只だ蘆花浅水の辺に在らん

【通釈】

起句　釣りをやめて帰って来ても、船を繋ぎとめたりしないで、乗り捨てのままにする。
承句　川辺の村に月が落ちて、丁度眠る時刻だ。
転句　もし夜のうちに風が出て、船を吹き流したところで、
結句　この蘆の花のしげみの、どこか浅瀬の辺りに漂っているだけのことだから。

【語釈】

◉江村…川ぞいの村。◉即時…その場のことを題材にして詩をつくること。◉堪眠…眠るのによい時刻。◉縱然…たとい、もし、かりに・・したところで。

【押韻】下平声一先韻　　船、眠、邊。

【解説】

江村での閑適の生活をすらりと詠じた佳作で、作者の人柄がにじみ出ています。司空曙（七四〇―？）は廣平県（今の河北省）の生れ、七七〇年頃科挙及第の後、左拾遺、節度使幕僚等を歴任。潔癖な性格で権勢に媚びず、家は貧しかったが平然としていたという。その詩は幽閑で清革と評され、作者は大暦十才子の一人に数えられている。

3　玉階怨

夕殿下珠簾
流螢飛復息
長夜縫羅衣
思君此何極

玉階怨　　謝　朓
夕殿　珠簾を下し
流螢　飛んで　復息やむ
長夜　羅衣を縫えば
君を思うこと　此に何ぞ極まらん

【通釈】

起句　夕ぐれ時の宮殿の中、美しい簾を下ろすと、

承句　簾越しに蛍の火が流れ飛んでは消える。

転句　秋の夜長に、ひとりで薄絹の衣を縫っていると、

結句　あなたを思う切ない心はとめどなく、いや増すばかり。

【語釈】

◉玉階…玉のきざはし。宮殿のきざはし。◉「玉階怨」は宮殿に住む女性の悲しみの意。◉夕殿…夕方の御殿◉珠簾…真珠で飾ったすだれ、美くしいすだれ◉流螢…風にまかせて飛ぶ蛍。◉息…止む。いこう。◉長夜…長い夜。秋の夜長。◉羅衣…薄絹の衣。◉何極…どうして尽きることがあろうか。何は反語。

【押韻】入声 十三職　　韻、息、極。

【解説】

謝朓(四六四―四九九)は南北朝時代、南朝斉を代表する詩人。清麗な風で知られる。この詩は宮殿の美しい簾の中で、ひとり衣を縫う女性に、点滅する蛍を配し、その心中を詠出して見せた絶品です。尚この詩は、後の唐代に詩型として完成する五言絶句のさきがけをなすものとされています。

4 尋隠者不遇

松下問童子　　隠者を尋ねて遇わず　賈島

言師採薬去　　松下童子に問う、

只在此山中　　言う師は薬を採りに去ると。

雲深不知處　　只だ此の山中に在らんも、

　　雲深くして処を知らず

【通釈】

起句　山中に隠者の住いを尋ねて行き、松の木の下に居た子供に「先生はおいでかな？」と尋ねると、

承句　「先生は薬草採りに出かけました」との返事。

転句　きっとこの山中にいるにはちがいないが、

結句　なにぶん雲が深くたちこめて所在が知れず、遇わないまゝ帰って来たことであった。

【語釈】
◉隠者…俗世を避けて隠れて住む人。◉童子…こども、召し使いの子供。◉師…先生、師事する人。◉薬…薬草。◉只在…きっといるに違いない。只はここでは推量を強調する語。

【押韻】去声 六御　　韻、去、處。

【解説】
賈島(七七九―八四二)は范陽(今の河北省)の人。はじめ出家して僧となったが、韓愈にすすめられ還俗し、進士に及第した。韓愈との出会いは推敲の故事で知られている。又、自ら苦吟したことで有名。
この詩は知人の隠者を尋ねて会えなかった事を詠じたものであるが、短い詩中に松下・童子・薬・山中・雲等の語を配し、隠逸の住まいの様子を美事に画き出した名吟です。

5　送元二使安西

元二の安西に使いするを送る　王維

渭城の朝雨軽塵を浥し
客舎青青柳色新たなり
君に勧む更に尽せ一杯の酒
西のかた陽関を出れば故人無からん

【通釈】
起句　渭城の町は、夜来の雨で土ぼこりも上がらずしっとりとうるおっている。
承句　(昨夜別れの宴を催した)宿屋の前には、芽ぶいたばかりの柳が水を含んで、青々といっそう色鮮やかである。
転句　さあいよいよお別れだ、元君どうぞもう一杯飲んでおくれ。
結句　これから西に旅して、陽関の関所を出れば、もう一緒に酒をくみ交す友人もいないだろう。

【語釈】
◉元二…人名。元は姓、名は不詳。二は一族中の兄弟、いとこの中の年齢順が二番目の意。この呼び方を排行という。◉安西…地名。今の甘粛省の西端の要衝の地。唐代、ここに西域守護の為の安西都護府があった。◉渭城…咸陽の別名。都長安の北、渭水をはさんだ対岸にある。当時西方に旅立つ人をここまで見送るのが常であった。◉朝雨…朝の雨。◉浥…うるおす。ぬらす。◉客舎…旅館、宿屋。前夜ここで送別の宴を張ったことを暗示する。

◉柳色新…雨で柳の色が一そう鮮やかになったこと。当時、遠く旅立つ人に無事の帰還を祈り、柳の小枝を丸めて餞別に手渡す風習があった。◉陽関…甘粛省、敦煌の近くにある関所。古来、玉門関とともに西域に往来するとき必ず通る関所。玉門関の南にあるのでこの名がついた。◉故人…友人、古くからの友人。

【押韻】上平声 十一真韻　　塵、新、人。

【解説】

王維（六九九―七六一）は盛唐期を代表する大詩人の一人。経歴は平成二十五年九月の解説（漢詩鑑賞欄）参照。

この詩は作者の友人の元某が朝命を帯びて、遥か西の果て安西に旅立つのを見送った時の作で、古来送別詩の代表的傑作とされているものです。この詩が出来た唐代から、送別の席で盛んに歌われるようになり、詩の一部の句、或は全句を三度くりかえして歌ったことから陽関三畳或いは陽関曲と呼ばれ、やがてこの語が送別の歌を意味するようになりました。

6　涼州詞

涼州詞　　王翰

葡萄の美酒　夜光の杯
飲まんと欲すれば　琵琶　馬上に催す
酔いて沙場に臥す　君笑うこと莫かれ
古来　征戦　幾人か回る

葡萄美酒夜光杯
欲飲琵琶馬上催
醉臥沙場君莫笑
古來征戰幾人回

【通釈】

起句　葡萄のうま酒を玉杯になみなみと注げば、杯は夜空の星の光をうけて赤々と輝く。
承句　いざ飲もうとすると、そばでは馬上で琵琶をかき鳴らす者がいる。
転句　飲む程に酔いしれて、そのまま砂漠の上に倒れふしてしまう。この姿を諸君笑わないでくれたまえ。
結句　昔からこの辺塞の地に出征して来た兵士のうち、無事生還出来た人が幾人いるだろうか。

【語釈】

◉涼州詞…涼州は地名。今の甘粛省武威県。唐の開元年間、この地の長官が塞外の歌を集めて朝廷に献上し「涼州宮調曲」と呼んだことからこの名が始り楽府題（がふだい、宮中に採録された歌曲題）となった。その後、多くの詩人がこの題の詩を作った。辺塞の風物や出征兵士の苦しみを詠じたものが多い。

◉葡萄美酒…葡萄酒をいう。葡萄及び葡萄酒は、いずれも西域から伝わった。古くは周の穆王のとき西の胡人が伝えたという伝説があり、漢の時代はじめて葡萄を植えたという。又、唐の太宗のとき、西域の高昌国を破り、葡萄の実を持ち帰り、葡萄酒を醸造、長安の人はじめてその味を知ったという記録がある。

◉夜光杯…名玉（白玉）で作った杯で、夜中に光を放つという。周の穆王のとき、「西胡（西域の胡人）夜光常満杯を献ず、盃は是れ白玉の精にして・・・」とある伝説に基く。但し、この詩の場合は、夜空の星の光に、きらりと輝く葡萄酒の杯を、この伝説の名器に見立てて詠じたもの。

◉琵琶…弦楽器。これも西域から伝来された。馬上で弾くものという。◉砂場…砂漠或いは砂漠の戦場。◉君…広く読者、世人一般に向っていう。◉征戦…戦争に征く。

【押韻】上平声 十灰韻　　杯、催、回(回)。

【解説】

王 翰（六八七？―七二六？）は并州晋陽（山西省太原）の人。唐の景雲元年(七一〇)進士及第。豪放な性格であったという。

この詩は塞外の地に出征した兵士の心情を詠じたもので、辺塞詩の最高傑作の一つに数えられているものです。起句、承句で葡萄酒、夜光杯、琵琶の三点で都を遠く離れた西域での酒盛りであることを示します。転句では一転して、砂漠の砂の上で酔いつぶれるという殺伐とした情景を演出し、結句で「一体自分は生きて故郷に帰れるのであろうか？」という兵士のぎりぎりの心の叫びを詠じて読者に迫ります。ある人はこの詩を「征夫の心情を写し出して、語は極めて壮んであるが、意は極めて悲しい」と評しています。

涼州詞を更に一詩左に掲げます。

付一　涼州詞　　王 之渙

黄河遠上白雲閒　　黄河遠く上る白雲の間
一片孤城萬仞山　　一片の孤城万仞の山
羌笛何須怨楊柳　　羌笛何ぞ須いん楊柳を怨むを
春光不度玉門關　　春光度らず玉門関

7　回郷偶書

郷に回りて偶たま書す　　賀 知章

少小離家老大回　　少小家を離れて老大にして回る、
郷音無改鬢毛摧　　郷音改まる無く鬢毛摧かる。
兒童相見不相識　　児童相見みて相識らず、
笑問客從何處來　　笑って問う客は何れの処より来ると。

【通釈】

起句　若いころに志を立てて故郷の家を離れ、（長い間の宮仕えの後）年をとって帰って来た。

承句　お国なまりは昔のままで改まっていないが、鬢の毛はすっかり薄くなってしまった。

転句　（迎えてくれた一族の）子供達は、私と顔をあわせてもお互いに見知らない。

結句　（子供達は）にこにこしながら、お客様はどちらからいらっしゃいましたかと尋ねるのだ。

【語釈】

◉回郷…故郷に帰る。◉偶書…思いつくままに書きつける。◉少小…年の若いこと。年若い時。年少。◉老大…年をとること。老年。◉郷音…お国なまり。◉鬢毛摧…鬢の毛が薄くなること。テキストによっては鬢毛衰（鬢毛衰う）となっているものもある。◉児童…子供、この場合は一族のこどもと解す。◉相見不相識…相はここではお互いに意。

【押韻】上平声 十灰韻　　回、摧、來。

【解説】

賀知章（六五九―七四四）は盛唐前期の人。会稽永興（浙江省）に生れ、若くして文才を知られた。都に上り、則天武光后の証聖元年（六九五）進士及第。官途は順調に累進した。酒を好み、性格は磊落無欲で、玄宗皇帝に大いに気に入られた。李白の才を認め自ら皇帝に推挙したことは有名である。晩年願い出て職を辞し故郷、会稽に帰ったが、その時玄宗皇帝は多年の労をねぎらい、詔をもって鏡湖という湖を賜った。この詩はこの時作者が故郷に帰った時の感慨をややユーモラスなタッチで歌ったもの。都で皇帝の知遇を得るまでに出世しながら、お国なまりを改めない程に故郷を愛した作者が長い宮仕えの後帰ってみると、すっかりよそ者になっているという悲哀の情が句間ににじみ出ている絶品です。この詩は同題二首其一で、其二を左に示します。

付二　回郷偶書　　賀知章

離別家郷歳月多　　郷に回りて偶ま書す

近來人事半銷磨　　家郷に離別せし歳月多く

唯有門前鏡湖水　　近ごろ来れば人事半ば銷磨す

春風不改舊時波　　唯だ門前に鏡湖の水のみ有って

　　春風は改めず旧時の波

8　山亭夏日

綠樹陰濃夏日長

山亭夏日　　高駢

緑樹 陰濃やかにして 夏日長し、

樓臺倒影入池塘　　樓台影を倒しまにして池塘に入る
水精簾動微風起　　水精の簾動いて微風起り
一架薔薇滿院香　　一架の薔薇満院香ばし

【通釈】

起句　あおあおと生い茂った木々のかげは色濃く、長い夏の日の日ざしのもと、
承句　池のほとりの高殿はその姿をさかしまにして、静かな水面に影を落している。
転句　水晶のかざりついた美しい簾が、そよ風を受けてかすかに揺れ動き、
結句　棚いっぱいに咲いている薔薇（ばら）の花の香りが庭じゅうに満ちている。

【語釈】

◉山亭…山中の別荘。◉陰濃…木々の葉が生い茂って、色濃くなっていること。◉楼台…たかどの。二階建て以上の建物。◉影…水に映った姿。◉池塘…①大きな池。②池のつつみ。ここでは前者。◉水精…①水精は水晶。②水精は水の精。ここでは前者。
◉一架…（薔薇を支える）棚いっぱいの。◉満院…庭じゅう。院は中庭。

【押韻】下平声 七陽韻　　長、塘、香。

【解説】

作者高駢（八二一–八八七）は幽州（河北省）の人。権勢の家柄に生れ、学問、武芸に優れ、地方長官や節度使等を歴任、晩唐の大乱黄巣の乱で功あり、渤海郡主に封ぜられたが、最後は武将に殺された。

この詩は、山中の別荘での静かな夏の日の優雅な趣きがあふれる情景を見事に画き出した佳作です。楼台、池塘、水精簾、薔薇等を品よくちりばめ、読む人をしてその庭に坐っているような気分にさせるところは流石です。当時唐の治世は漸く衰え、世情は騒然としていました。或は作者自身、その乱世なればこそこのような優雅なひとときを、いっそう大切に感じていたのかも知れません。この詩で当時（唐代）から薔薇を賞翫していたことがうかがえますが、これを詠んだ詩は古来比較的稀です。左に二例を掲げます。

付三　過目黒村　　目黒村を過ぐ　大正天皇

雨餘村落午風微　　雨余の村落午風微なり
新緑陰中蝴蝶飛　　新緑陰中蝴蝶飛ぶ
二様芳香來撲鼻　　二様の芳香来りて鼻を撲つ
焙茶氣雜野薔薇　　茶を焙るの気は雑わる野の薔薇に

付四　薔薇正開春酒初熟因招劉十九張大崔二十四同飲

薔薇正に開き春酒初めて熟す因りて劉十九・張大・崔二十四を招きて同に飲む　　白居易

甕頭竹葉經春熟　　甕頭の竹葉は春を経て熟し
階底薔薇入夏開　　階底の薔薇は夏に入りて開く
似火淺深紅壓架　　火に似たる浅深紅架を圧し
如餳氣味綠黏臺　　餳の如き気味緑台に黏る
試將詩句相招去　　試みに詩句を将て相い招去せん
儻有風情或可來　　儻し風情有らば或いは来たる可し
明日早花應更好　　明日早花応に更に好かるべし
心期同醉卯時杯　　心に期す同に卯時の杯に酔わんことを

9 池上

池上　　白居易

山僧對棋坐　　山僧棋に対して坐し
局上竹陰清　　局上竹陰清し
映竹無人見　　竹に映じて人の見る無く
時聞下子聲　　時に聞く子を下す声

【通釈】

起句　山寺の僧が碁盤をはさんで対局しており、
承句　盤上には竹の清らかな影が落ちている。
転句　竹林におおわれて誰も見る人はいない、
結句　時どき碁石を打ちおろす音が聞こえるばかり。

【語釈】

◉池上…池のほとり。この場合は池のほとりの邸又は亭の意。◉對棋坐…囲碁の対局をいう。◉局…棋局は碁盤。◉子…棋子は碁石。

【押韻】下平声 八庚韻　　清、聲。

【解説】

白居易（七七二 - 八四六）。字は楽天で、は中唐を代表する詩人。この人の詩は本欄でもすでに数多く鑑賞している。白居易は晩年太子賓客という名誉職を与えられたが、その数年前から洛陽に隠棲し、仏教に帰依して自ら香山居士と称し、香山寺の僧と親交を楽しんだ。

この詩はその頃（六十四歳）の作とされている。詩中の山僧は恐らくは香山寺の僧と作者自身で、香山寺の僧房かあるいは白居易邸での対局の様子を詠じたものであろう。白居易晩年の悠々自適の心境と生活ぶりをしのばせる作品で、心静かに鑑賞したい佳作です。詩は短い五言絶句の中に竹を二度重ね、俗界からの隔絶を強調しています。

10 對酒

酒に対す　　白居易

蝸牛角上争何事　　蝸牛角上何事か争う

石火光中寄此身　　石火光中此の身を寄す

隨富隨貧且歡樂　　富に随い貧に随い且く歓楽せん

不開口笑是癡人　　口を開いて笑わざるは是れ痴人

【通釈】

起句　かたつむりの角の上のような小さなこの世界で何を争うのか、

承句　火打ち石を打って発する火花のように、はかなく短い時間だけの人生だというのに。

転句　富めば富んだで、貧しければ貧しいなりに先ずは人生を楽しもう、

結句　大きく口をあけて笑わぬ奴はおろか者だ。

【語釈】

◉蝸牛角上…蝸牛はかたつむり。かたつむりの角の上での戦い。「荘子」則陽編にみえる寓話にもとづく。蝸牛の左の角の上には触氏、右の角の上には蛮氏が、それぞれ国をかまえて土地の争いをしたと。小さなことを相争うのを嘲った句。◉石火光中…石火光は、火打ち石を打って発する光、極めて短い時間のたとえ。◉且…まずは。とりあえず。◉開口笑…口をあけて愉快に笑う。「荘子」盗跖編に「人上寿は百歳、中寿は八十、下寿は六十。病瘦、死喪、憂患を除き、その中に口を開いて笑うは、一月のうち四五日に過ぎざるのみ」とあるを承ける。◉癡人…おろか者。

【押韻】上平声 十一真韻　　身、人。起句は踏み落とし。（起・承句は対句）

【解説】

白居易（七七二―八四六）、字（あざな）は楽天。中唐を代表する詩人。二十九歳で進士、三十五歳で更に上級試験に及第、高級官僚となった。この頃からさかんに諷諭詩を作り社会批判をおこなったが四十四歳の時江州（江西省九江）に左遷されてから閑適・感傷の詩が多くなった。その後、中央政府勤務と地方長官（杭州・蘇州）をくりかえし、後年は仏教に帰依、又道教に傾斜した。晩年は洛陽に隠棲し、七十五歳で没した。

11　苦熱題恒寂師禪室

熱に苦しみ恒寂師の禪室に題す　白　居易

人人避暑走如狂
獨有禪師不出房
可是禪房無熱到
但能心靜卽身涼

人々　暑を避け　走ること狂うが如し
独り禪師の房の　出でざる有り
是れ禪房に熱の　到ること無かる可けんや
但だ能く　心　静かなれば　即ち身涼し

【通釈】

起句　世の人々は、夏の暑さを避けようと、まるで狂ったように右往左往しているが、
承句　恒寂禪師だけは、座禪室から外に出られることはない。
転句　これは決して、座禪堂に熱が入ってゆかないなどということではない。
結句　ただ禪師が心静かに禪の修行をして居られる為、身体も自然と涼しいのだ。

【語釈】

◉苦熱…暑さに苦しむ。作者が暑さに苦しみながら、の意。◉恒寂師…禪僧の名。禪師は徳の高い禪僧。◉禪室…禪を修行する部屋、禪房。◉題…書きつける。～について詠ずる。恒寂禪師の禪室の壁に書きつけた詩の意。

【押韻】下平声 七陽韻　　狂、房、涼。

【解説】

白居易（七七二―八四六）、字は楽天。中唐を代表する詩人。二十九歳で進士。三十五歳で更に上級試験に及第、高位官僚となった。元稹、劉禹錫、韓愈等当時の顕官達と親しく交り、自らも顕職に就いたが、努めて政争に関ることを避けた。晩年は洛陽に半ば隠棲し、佛教に帰依し、洛陽近くの香山寺の僧と交り、自ら香山居士と号するなど満ち足りた老境を楽しみ、七十五歳の長寿を全うした。

この詩は、親しい友人である禪僧の座禪堂の壁に書きつけたもので、白居易自身の禪に対する信仰と憧憬が巧まず表現された作。

付五　紫陽花　　紫陽花　白　居易

招賢寺有山花一樹。無人知名。色紫氣香。芳麗可愛。頗類仙物。因以紫陽花名之。

招賢寺に山花一樹有り。人の名を知る無し。色は紫にして気は香しく。芳麗愛す可く。頗る仙物に類す。因って紫陽花を以て之に名づく。

何年植向仙壇上
早晩移栽到梵家
雖在人間人不識
與君名作紫陽花

何れの年にか仙壇の上に植えられ
早晩移し栽えられて梵家に到る
人間に在りと雖も人識らず
君に名を与えて紫陽花と作さん

12 夏日題悟空上人院

夏日悟空上人の院に題す　　杜荀鶴

三伏閉門披一衲
兼無松竹蔭房廊
安禪不必須山水
滅得心中火自涼

三伏門を閉じて一衲を披る
兼ねて松竹の房廊を蔭う無し
安禅　必ずしも山水を須いず
心中を滅し得れば火も　自ら涼し

【通釈】

起句　真夏の酷暑のもとで門を閉ざし、僧衣をはおり座禅を組んでおられる。
承句　僧院の部屋や廊下に蔭を作り、暑さを防いでくれる松も竹も無い。
転句　名僧が心身を安らかにして禅定に入るには、必ずしも深山や渓谷を必要としない。
結句　心中の雑念を消し去って、空の境地に達すれば火の中にあってもおのずと涼しいのだ。

【語釈】

◉題…詩を書きしるすこと。◉悟空上人…人物不詳。初唐に玄奘に随って印度に渡り帰って多くの経典を訳した同名の高僧が居たが、別人と思われる。◉院…僧院、寺。◉三伏…夏の暑さのきびしい期間をいう。夏の土用を初伏、中伏、末伏の三期に分けた称。伏とは火気(陽の気)を恐れて金気(陰の気)が伏蔵するという意。◉兼…ともに。二つながら。◉房廊…僧院のへやと廊下。◉安禪…心身を安らかにして禅定に入ること。禅定とは、座禅で俗情を断ち精神を統一し、心を静めて三昧の寂境に入ること。

【押韻】下平声 七陽韻 廊、涼。起句は踏み落とし。

【解説】

杜荀鶴（八四六－九〇四）は末唐の詩人。大順二年（八九一）進士及第したが、世の混乱を避けて郷里池州（安徽省）の九華山に隠棲した。後、朱全忠に重んぜられ、主客員外郎、知制誥に至った。若くして詩名を馳せた風流人であった。

この詩は恐らくは隠棲時代の作で、或いは作者自身参禅したのかも知れない。禅の境地を詠じたこの詩の転句と結句は後世禅の偈(げ)となった。我が国では、天正一〇年（一五八二）織田信長が甲斐の国で武田勝頼を討った時、焼き討ちされた武田家ゆかりの恵林寺の快川和尚が火の中で平然と唱えたという「滅却心頭火亦涼」（心頭を滅却すれば火も亦涼し）となって広く知られる偈となりました。

13 有約

黄梅時節家家雨
青草池塘處處蛙
有約不來過夜半
閑敲碁子落燈花

約有り　趙　師秀

黄梅の時節　家家の雨
青草の池塘　処処の蛙
約有れども　来たらず　夜半を過ぎ
閑に碁子を敲いて　灯花を落とす

【通釈】

起句　梅雨の時節とて、村の家々は鬱陶しい雨の中にひっそりと静まり、
承句　青い草の繁ったため池の堤では、あちらこちらで蛙が鳴き交わしている。
転句　約束の友人は夜半が過ぎてもまだ来ない。
結句　しかたなく暇つぶしに一人で碁石を打ち下ろして、傍らの灯心の燃えかすを音もなく落としているのだ。

【語釈】

◉約…約束、この場合は来訪の約束。◉黄梅時節…梅の実の黄色く熟する時節。この頃降る雨を「黄梅の雨」と呼ぶ。即ち、梅雨。◉家家…家毎に。◉池塘…池の堤。◉處處…至るところ。あちらでもこちらでも。◉碁子…碁石。◉敲…たたく、うつ。敲碁子は碁石を打ち下ろすこと。敲碁。◉燈花…灯心の先にできる燃えかすのかたまり。

【押韻】下平声 六麻韻　蛙、花、起句は踏み落とし。

【解説】

作者は南宋、永嘉（浙江省温州）の人。宋の太祖、趙匡胤の八世の孫。紹熙元年（一一九〇）の進士。その詩は清新円美と評されている。南宋の都した浙江地方は気候風土が我が国と類似している。この詩の前半に見事な対句構成で描写する風景は、我が国の梅雨期のそれと変わりない。その中で深夜まで約束の友人（おそらくは碁友）の来訪を待って

一人棋譜を並べている様子が目に見えるようで、読む人の心を和ませてくれる美しい作品です。

14 絶句

絶句　　僧 顯萬

萬松嶺上一間屋　　万松嶺上一間の屋
老僧半間雲半間　　老僧半間雲半間
五更雲去逐行雨　　五更雲去って行雨を逐い
回頭却羨老僧閑　　頭を回らして却って羨やむ老僧の閑

【通釈】

起句　万松嶺の頂きのほとりにある、ひと間だけの小さな庵
承句　そのひと間の半分に、老いた私が棲んでおり、残りの半分は雲の棲み家。
転句　朝、夜明け前になると、雲は出かけて行き、山に降る雨を追いかけながら、
結句　ふりかえって、この老僧の閑ひまな姿を羨んでいるのだ。

【語釈】

◉萬松…嶺山の名、今の浙江省、杭州市の南にある。◉一間屋…ひと間だけの庵。◉五更…午前四時頃。更は漢代以後、夜を五つに区分した時刻の称呼。◉行雨…降る雨。◉却…かえって。悠然たる雲は古来人の羨む対象であるのに、逆にの意。

【押韻】上平声 十五刪韻　間、閑。

【解説】

顯萬は南宋の僧侶。この詩は万松嶺上の小庵に独り棲む自らの生活ぶりを詠じたもの。雲を擬人化して、一室に共に棲むという面白い発想は、唐の陸亀蒙（唐末の隠士、蘇州の人）の次の詩に基づくもの。

山中僧　　陸 亀蒙

手関一室翠微裏　　手ずから一室を関ざす翠微の裏
日暮白雲棲半間　　日暮白雲半間に棲む
白雲朝出天際去　　白雲朝出でて天際に去るも
若比老僧猶未閑　　若し老僧に比せば猶未だ閑ならず

15 插秧

種密移疎緑毯平
行間清淺穀紋生
誰知細細青青草
中有豐年擊壤聲

挿秧　　范　成大

種くこと密に 移すこと疎にして 緑毯 平かなり
行間 清浅にして穀紋 生ず
誰か知らん 細々 青々の草
中に豊年 撃壤の声有るを

【通釈】

起句　びっしりと密に播かれた苗代の苗をとり、まばらに植えてゆけば、田は一面緑の絨毯のようである。

承句　田植えを終えたばかりの苗の列の間は、浅く清らかな水が満ち細かな水紋がゆれている。

転句　誰が知っているだろう、このか細くただ青々とした苗の中に、

結句　秋の豊作を喜ぶ鼓腹撃壤の声が潜んでいることを。

【語釈】

◉插秧…田植え。◉種…たねをまく。この場合は苗代に播かれた状態をいう。◉緑毯…緑の絨毯。◉行間…植えられた稲の列の間。◉穀紋…しわのような模様。穀はちりめん（縮緬）◉豊年…作物が豊かに実った年。又豊かなみのり。◉撃壤…鼓腹撃壤。農民が腹づつみを打ち、大地を踏みならして太平無事を楽しむさまをいう。（古の堯帝の故事）

〔十八史略・五帝〕有老人、含哺鼓腹、撃壤而歌曰、日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力何有于我哉。

【押韻】下平声 八庚韻　　平、生、聲。

【解説】

范成大（一一二六―一一九三）は南宋の有能な愛国政治家であり、また詩人としても楊万里、陸游と並び南宋三大詩人の一人とされる。晩年は郷里蘇州に隠居し、江南の農民の暮らしぶりを詠じた連作「四季田園雑興」六十首を作った。本欄では、平成二十五年年十一月「冬日田園雑興」を、また平成二十六年十月「秋日田園雑興」を鑑賞した（トップページの左欄の「漢詩鑑賞」に掲載してます）。

今回の詩「插秧」も田園を題材とし、田植を終えたばかりの稲田のか細い苗の中に、秋の豊作を喜ぶ農民の声を聞くという、田園詩人 范成大ならではの、農民に対する暖かい愛情のこもった清らかな作品です。

付六　夏日田園雑興其十一　夏日田園雑興其の十一　范成大

采菱辛苦廢犂鉏　菱を采るに辛苦して犂鉏を廃つ
血指流丹鬼質枯　血の指は丹を流して鬼の質は枯る
無力買田聊種水　力の田を買う無く聊か水に種えしに
近來湖面亦收租　近来湖面も亦た租を収む

付七　憫農　李紳

鋤禾日當午　農を憫む
汗滴禾下土　禾を鋤いて日午に当たる
誰知盤中餐　汗は滴る禾下の土
粒粒皆辛苦　誰か知らん盤中の餐
　　粒々皆辛苦なるを

16 金州城外作

金州城外の作　乃木希典

山川草木轉荒涼　山川草木転た荒涼
十里風腥新戰場　十里風腥し新戦場
征馬不前人不語　征馬前まず人語らず
金州城外立斜陽　金州城外斜陽に立つ

【通釈】

起句　山も川も草も木も、荒れはててものさびしい。
承句　十里四方なまぐさい風が吹きわたる、ここは戦いが始まったばかりの新戦場である。
転句　軍馬も進まず、兵士たちもおし黙ったまま一語も発しない。
結句　私は(大軍を率いて旅順攻略に向わんとして)、金州城外の夕日の中に立ち尽くしているのだ。

【語釈】

◉金州城…遼東半島の南部にあり、旅順港の後背に当る要衝の地。その城外南山で激戦があった。◉轉…うたた。いよいよ。ますます。◉荒涼…荒れはててものさびしい。◉腥…なまぐさい。◉征馬…軍馬。◉前…すすむ。◉斜陽…西に傾いた太陽。夕日。

【押韻】下平声 七陽韻　涼、場、陽。

【解説】

乃木希典（一八四九―一九一二）は明治の将軍。陸軍大将。長州藩の出身。若くして戊

辰戦争に従軍。維新後、西南戦争には連隊長、日清戦争には旅団長として従軍。日露戦争には第三軍司令官として旅順要塞を攻略、さらに奉天会戦に加わった。日露戦争の功により爵位を授けられ、明治天皇の命により学習院院長となったが、明治45年明治天皇の大葬の夜、妻静子と共に自刃殉死し、その清廉な武人の一生を終わった。なお乃木家の二人の男児（長男・勝典、次男・保典）はいずれも軍人として日露戦争で戦死した。

この詩は明治37年６月６日、第三軍司令官として遼東半島に上陸、旅順攻略に向う途中、金州城外南山での作。ここ南山はその直前５月26日の第二軍による激戦において乃木の長男陸軍中尉勝典が戦死した地である。大軍を率いて、まさに祖国の存亡をかけた決戦に臨もうとし、自らの長男の戦死の地に立つ、武将の悲壮な心情を見事に歌い上げた不朽の傑作です。

17　聽　蟬

蟬を聴く　　楊　萬里

說露談風有典章　　露に説き風に談じて典章有り
詠秋吟夏入宮商　　秋に詠じ夏に吟じ宮商に入る
蟬聲無一些煩惱　　蟬声一些の煩惱無く
自是愁人枉斷腸　　自ら是れ愁人枉げて断腸

【通釈】

起句　木々の露に話しかけ、又風と語りあっているように聞こえる蟬の声は規則正しくひびき、
承句　秋にうたい、夏に吟じている声は常に音階にかなっている、
転句　この無心に鳴く声には、いささかの迷いも無いのに、
結句　それを聞く悩み多き人間が、いたずらに心を痛め悲しむのだ。

【語釈】

●典章…規則、制度。●宮商…音楽の調子。宮・商はいずれも音楽の五つのねいろの一。
●一些…わずか●煩惱…(仏語)、心の迷い。人の世の欲情のわずらい。●自是…自然と
●愁人…心に愁いや悲しみを持っている人。又詩人をいう。●枉…いたずらに。むなしく。
●斷腸…はらわたがちぎれるほどの思い。非常な悲しみ。

【押韻】下平声 七陽韻　　章、商、腸。

【解説】楊萬里（一一二七―一二〇六）は南宋の人。
陸游、范成大と共に南宋三大詩人と評されている。紹興二十四年(一一五四)進士に及第、

中央、地方の官職を歴任した。性格は剛直、私生活は清潔であった。晩年は隠棲したが、病床にあって権臣の暴政をいきどおり憤死した。詩風は自由豁達、新鮮な発想を身上とし、作品は四千二百首に達するという。

夏の風物詩とされる、無心に鳴く蟬の声に詩人達は季節のうつろいや、生のはかなさを感じて愁いの対象とする。

この当時、南宋は北方金国からの圧迫に苦しみ、内には政争が絶えず、政治家楊萬里の悩みは尽きなかったであろう。

この詩の結句に配した断腸の語は単なる詩的修辞ではなく、憂国の詩人政治家楊萬里の心底からの絶唱として鑑賞すべきでしょう。

18 夏 意

夏意　蘇 舜欽

別院深深夏簟清
石榴開遍透簾明
樹陰滿地日當午
夢覺流鶯時一聲

別院 深々として 夏簟清く
石榴 開き遍くして 簾を透して明らかなり
樹陰 地に満ち 日は午に当たる
夢覚むれば 流鶯 時に一声

【通釈】

起句　此処、はなれの部屋は静まりかえり、夏用に敷いたござが清らかですがすがしい
承句　庭のザクロは樹一面に花を開き、簾を透して赤い花の色がはっきりと見える。
転句　樹の影が庭の地面を掩い、日はまひるどき。
結句　昼寝からふと目を覚ますと、枝を渡る鶯の声が時どき聞こえてくる。

【語釈】

◉夏意…夏のおもむき◉別院…別に建てた建物。はなれ。◉深深…静まりかえっているさま◉夏簟…夏に用いる敷物。たかむしろ。ござ。簟は、竹や藺(いぐさ)で編んだむしろ。ござ。◉石榴…ザクロ。夏の初、深紅色の花を開き、秋に実を熟す。◉當午…正午。太陽が真南に来たこと。午は十二支のうま。時刻では午后零時。方位は正南。◉流鶯…枝から枝へ飛び移って鳴く鶯。

【押韻】下平声 八庚韻　　清、明、聲。

【解説】

蘇舜欽（一〇〇八―一〇四九）、は北宋の人。字は子美。若くして慷慨、大志あり、進士に及第、累進したが、後失脚。蘇州に寓居。滄浪亭を作り、自ら滄浪翁と号した。よく

古文、歌詩を作り梅堯臣と詩名を等しくした。この詩は初夏のまひる時。恐らくは滄浪亭のはなれに冷ややかなござを敷いての昼寝から覚めて、ふと鶯の声を聞くという趣向。作者の悠々たる生活ぶりをさらりと詠じたもので、一服の清涼剤ともいえる清らかな美しい小品です。

19　喜逢鄭三遊山

鄭三の山に遊ぶに逢うを喜ぶ　　盧仝

相逢うの　処　花茸々たり
石壁　攢峰　千万重
他日　君を期するに　何れの　処　か好からん
寒流　石上　一株の松

相逢之處花茸茸
石壁攢峰千萬重
他日期君何處好
寒流石上一株松

【通釈】

起句　貴方とお逢いした此処は草花がぼうぼうと生いしげり、
承句　きり立った崖やむらがりあつまる峰々が幾重にもかさなっている。
転句　いつの日か、又お逢いしたいが、どんな処がよいだろう、
結句　次回は、つめたい流れの切り立った岩のほとりの一本の松の下、そんな処で　お逢いしましょう。

【語釈】

◉鄭三…鄭は姓、三は俳行で、一族同世代の兄弟、いとこを年齢順に呼ぶ数。鄭三の人物・経歴は不詳。◉遊山…作者の盧仝が、嵩山に隠棲した隠者であったことから、遊山は単なる山歩きではなく、鄭三が盧仝を嵩山に訪ねたことを指すと解釈する。◉茸茸…草が盛んに茂っているさま。◉攢峯…重なり続いている峰。攢はあつまる、むらがる意。◉他日…別の日。いつか。今より以前(前日)、以後(後日)どちらにも用いる。この場合は勿論後日。◉期…約束してであう。◉寒流…つめたい水流。冬の川。

【押韻】上平声 二冬韻　　茸、重、松。

【解説】

盧　仝（七九五？－八三五）は范陽(河北省)の人。中唐末期の詩人。世の乱れを避けて嵩山の小室山に隠棲し、朝廷から招かれたが出仕しなかった。詩に巧みで韓愈の知遇を得た。

此の詩は恐らくは、鄭某が盧仝の隠棲する嵩山を訪ね、意気投合し、再会を期して別れた時の喜びを詠じたものであろう。次回は嵩山の更にすばらしい処にご案内しましょうと云っているのである。隠者の面目躍如たる清らかな佳作です。

20 早發白帝城

早に白帝城を発す　　李白

朝辭白帝彩雲間
千里江陵一日還
兩岸猿聲啼不住
輕舟已過萬重山

朝に辞す白帝彩雲の間
千里の江陵一日にして還る
両岸の猿声啼いて住まざるに
軽舟已に過ぐ万重の山

【通釈】

起句　朝早く、朝焼け雲のたなびく白帝城に別れをつげて、
承句　三峡を下り、千里も隔った江陵まで、僅か一日で到着した。
転句　両岸の切りたった崖からは、猿のなき声がひっきりなしに聞こえ、その声がまだ耳にのこっている間に、
結句　私が乗った小舟は、いくえにも重なる山々の間を通過したのだ。

【語釈】

◉早…朝早く◉白帝城…四川省奉節県にある。長江（揚子江）航行の難所として名高い三峡の瞿塘峡に臨む崖の中腹に立っている。前漢末に公孫述が自ら白帝と称して築いたとりで三国時代蜀の劉備が拠り、ここで没した。◉彩雲…朝焼け雲。◉千里…千里隔たった（江陵）の意。当時の一里は三百六十歩の道のり、約五百米。◉江陵…湖北省江陵県。春秋戦国時代楚国の都郢の地。又荊州ともいう。長江に臨む。◉一日還…一日で到着する（した）の意。実際には困難だが、長江の流れの速さを強調した表現。◉猿聲…三峡の両岸の切り立った崖には猿が多く、その啼き声は悲しかったという。多くの詩に詠まれている。◉啼不住…絶えまなしに啼く。◉萬重山…幾重にも重なる山々。

【押韻】上平声 十五刪韻　　間、還、山。

【解説】

李白（七〇一―七六二）、二十五歳の作。後世詩仙と称せられるようになる李白は、五歳の時両親と共に蜀（四川省）に移り住み、その地で成長、二十五歳の時志を天下に求め、はじめて蜀を後にして長江を下った。この詩はその時の作とするのが一般的である。
朝焼けの下、白帝城に別れを告げればいよいよ異郷の地。感傷にひたる間もなく軽舟は千里先の江陵へと、万重の山の間を飛ぶように流れ下る。この美しい情景描写の中に未来に挑む若者の爽やかな心情が読みとれる。この詩は古来李白の代表作の一つに挙げられ、また唐代七言絶句の随一とさえ評される傑作です。

21 夏日山中

懶搖白羽扇
裸體青林中
脱巾掛石壁
露頂灑松風

夏日山中　李白
白羽扇を揺がすに懶く
裸体青林の中
巾を脱して石壁に掛け
頂を露して松風を灑がしむ

【通釈】
起句　扇を使うのさえもけだるい暑さ、
承句　青々とした林の中にすっぱだかになる。
転句　ずきんもぬいで石の壁に掛け、
結句　頭のてっぺんをむき出して涼しい松風を吹きかけさせる、この心地よさ。

【語釈】
◉白羽扇…白い鳥の羽で作ったうちわ。この詩では承句の青林と対比させて涼しさを演出している。◉懶…ものうい、けだるい。◉裸體…はだか。はだかになる◉青林…青々とした林。◉巾…ずきん。◉露頭…頭のてっぺんをあらわにする。◉灑…そそぐ。上からそそぎかける。

【押韻】上平声一東韻　中、風。

【解説】
李白（七〇一―七六二）は、杜甫と並び、盛唐を代表する大詩人。杜甫の詩聖に対し、詩仙と称される。特に絶句を得意とし、詩風は豪放絢爛。
この詩は前半で、扇の白と林の青の中、意表をつく裸体によって涼しさを強調。更に後半の見事な対句に石壁と松風を配して酷暑の中に涼を求める作者の姿を赤裸々に詠みこみ、読む人をも涼しくさせてくれる、李白ならではの痛快な作品です。

22 望廬山瀑布

日照香爐生紫煙
遙看瀑布挂長川
飛流直下三千尺
疑是銀河落九天

廬山の瀑布を望む　李白
日は香炉を照らし紫煙を生ず
遥かに看る瀑布の長川に挂くるを
飛流直下三千尺
疑うらくは是れ銀河の九天より落つるかと

【通釈】
起句　太陽がさんさんと香炉峰を照らし、山々は紫にかすむ山の気に美しく包まれており、
承句　遥か彼方に、滝が長大な川をたてかけたように流れ落ちているのが見える。
転句　（ちかずけば）その流れの勢いはものすごく、まっすぐに三千尺もの高さを飛び下って、
結句　まるで天の川が、天空から流れ落ちているのではないかとまがうばかりである。

【語釈】
◉廬山…江西省九江の南にある名山。多くの峰から成る景勝の地。李白は一時ここに棲んだことがある。その昔周の時、匡俗が此の山に隠れ定王の招きに応じないので使者をやって之を訪うたところ、既に登仙して無人の廬（いおり）があったので廬山と名づけたという。又匡廬ともいう。◉瀑布…大きな滝。◉香爐…ここでは香炉峰をいう。廬山中の峰の一つ。山の形が香炉に似ているところからこの名がある。◉紫烟…山の気が日光に映じて紫色にかすんでいること。◉挂長川…落下する滝が川をたてかけたように見える意。挂はかける。◉直下…まっすぐに落ちる。◉三千尺…ここでは非常に長い例え。実数ではない。◉疑是…～かと見まがう。◉銀河…天の川。◉九天…おおぞら。天の最も高いところ。

【押韻】下平声一先韻　　烟、川、天。

【解説】
李白（七〇一～七六二）は盛唐の人。杜甫と並んで中国を代表する大詩人。酒を好み詩仙と称せられる。詩風は豪放。五十六歳の時、安史の乱を避けて廬山に隠棲した時期があり、この詩はその頃の作とする説が有力である。
詩の前半は香炉峰という美しい山名に紫烟を配し、その中に長大な瀑布のかかる望景を述べ、転句、結句では滝自体をいかにも李白らしく豪快に詠じた構成も美事で、じっくりと味わいたい傑作です。

23 初夏

四月清和雨乍晴
南山當戸轉分明
更無柳絮因風起
惟有葵花向日傾

初夏　　司馬　光
四月清和雨乍ち晴れ
南山戸に当って転た分明
更に柳絮の風に因って起こる無く
惟だ葵花の日に向って傾く有り

【通釈】
起句　四月(陰暦)の初夏の天候はすがすがしくやわらぎ、雨はさっとあがって晴れわたった。

承句　南にそびえる山は、家の真正面にはっきりと見える。
転句　もはや柳のわたが風に吹かれて乱れ飛ぶこともなく、
結句　ただ庭先のひまわりが、日に向かって花を傾けているのがあるばかりだ。

【語釈】
◉初夏…夏のはじめ。陰暦四月。尚、詩題は「客中初夏」となっている本もある。◉清和…きよらかでやわらぐ意。陰暦四月、又四月一日の異称。又その時節の天候の形容。又、よく治まった世の形容に用いられる。◉乍…たちまち。急に。◉南山…南に見える山。◉當戸…家の正面に見えるま近なところに。◉轉…うたた。いよいよ。ますます。◉分明…あきらか。はっきりと見える。明瞭。◉更無…全然…でない。更は無の意味を強める用法。◉柳絮…柳のわた。柳の実が熟して種についている白毛が綿のように飛び散るもの。晩春の風物。◉因風起…風に吹かれて乱れ飛ぶ。◉葵花…日まわりの花。日まわりの花は、常に日光の方に傾き向かうので、葵花向日(きかひにむかう)なる語が生まれた。忠誠の心で君主を仰ぎ慕うたとえに用いられる。

【押韻】下平声 八庚韻　　晴、明、傾。

【解説】
司馬光（一〇一九―一〇八六）字は君實、北宋の政治家であり学者。二十歳で進士及第、累進して御史中丞となったが、王安石の新法に反対して官を辞して去り、洛陽に引きこもり、十五年間政治に関わらず、この間に史書「資治通鑑」二百九十四巻の大著を撰した。後再び政界に復帰し宰相となったが間もなく死亡し、太師温国公の称号を贈られた。
この詩は洛陽引退中の作とされている。初夏のすがすがしい風景を詠じた美しい作品で作者の人柄を感じさせる。一方この詩には寓意がこめられているという様々な説がある。起句の清和、結句の向日傾等の用法を見ると、私かに政治家司馬光自らの忠誠の心境を托した詩と見るのも、あながち見当違いではないのかも知れません。

24　鄂渚南樓書事

四顧山光接水光
凭欄十里芰荷香
清風明月無人管
併作南樓一夜涼

【通釈】
鄂渚の南楼にて事を書す　　黄　庭堅
四顧 山光 水光に接す
欄 に凭れば十里 芰荷 香 し
清風 明月 人の管する無く
併せて作す 南楼 一夜の 涼

起句　楼上から四方を眺めると、はるかな山々の色と、長江の水面の色が相接して見える。
承句　欄干にもたれていると、十里のかなたまで一面にひろがっている「ひし」と「はちす」のよい香りがただよって来る。
転句　更に、この清風と明月はだれのものでもなく、存分に味わってさしつかえのないもの。
結句　この両者を得て、ここ鄂州の楼上一夜の涼が一段と趣深いものとなっているのだ。

【語釈】
◉鄂渚…地名。湖北省武昌の東。長江に沿う。◉南樓…黄庭堅の書楼と解す。◉書事…所見、所感を書きしるす意。◉四顧…四辺を見まわす。◉山光…山の色。山の景色。◉水光…水面の光。水面の色。◉闌…欄干。手すり。◉芰荷…芰はひし。荷ははす。

【押韻】下平声 七陽韻　　光、香、涼。

【解説】
黄庭堅（一〇四五―一一〇五）は北宋の詩人。二十三歳で科挙に及第したが、新法党、旧法党の政争にまきこまれて浮沈多く、中央の要職に就くこと無く、殆ど地方官僚の生涯を送った。三十四歳の時、九歳年長の蘇軾に詩を贈って絶賛されその門下に入り蘇門四学士の一人に数えられた。北宋を代表する詩人の一人である。又書家としても有名。特に草書にすぐれた。晩年五十八歳の九月から五十九歳の十二月の間、鄂州に滞在したので、この詩はその間の作と考えられる。詩は、平易な表現の裏に、長江に沿った水辺の地鄂州の情景を美事に詠じている。転句の「清風明月無人管」は彼が師と仰ぐ蘇軾が鄂州に近い黄州に在って作った赤壁賦（一〇八二年作）の「……惟江上之清風、與山間之明月、……、取之無禁、用之不竭、……」からの引用であることは明らかで、この詩は赤壁賦と併せ鑑賞すると一層味わい深いものとなる。じっくりと味わいたい作品です。

25　野塘

野塘　韓偓

侵曉乘涼偶獨來　　暁を侵し涼に乗じて偶独り来る
不因魚躍見萍開　　魚の躍るに因らざるに萍の開くを見る
卷荷忽被微風觸　　巻荷忽ち微風に触れられ
瀉下清香露一杯　　瀉下す清香の露一杯

【通釈】
起句　早朝ようやく空の明けそめる頃、涼しさにひかれて何となく独りで野原の中の池のほとりにやって来た。

承句　魚が跳ねたのでもないのに、水面の浮き草が風に吹き寄せられ間をあけて動いている。
転句　はすの巻いた葉が突然そよ風に吹かれて、
結句　葉の上にたくわえていた清らかな香りの朝露を注ぎ落としてしまった。

【語釈】
◉野塘…野原の中の池。塘はつつみ、又池をいう。◉侵曉…明け方。まだ十分に明け放たれぬうちをいう。◉乘涼…納涼する。◉萍…浮き草。◉卷荷…巻いている蓮の葉。捲荷ともいう。◉瀉下…そそぎ下る。

【押韻】上平声 十灰韻　　來、開、杯。

【解説】
韓偓（八四四―九二三）は、唐王朝末期の人。昭宗の龍紀元年（八八九）進士及第。昭宗の信任厚く、累進し中書舎人、兵部侍郎となったが、権力者朱全忠に従わなかった為に疎まれ、地方に左遷された。その後朱全忠が昭宗を殺し次いで擁立した哀帝の天祐二年（九〇五）中央に招かれたが応じなかった。その二年後 天祐四年（九〇七）朱全忠は哀帝に強要して禅譲を受け即位。梁太祖と称し、ここに唐王朝は滅亡した。
この詩は、夏の早朝の爽やかな野塘の風景を動的にあたかも眼前に見えるように美しく詠じた叙景詩の佳作と言える。一方、この詩は暗喩の詩であるとして隠にこめられた詩意を読もうとする見方がある。即ち起句は自分が朝廷に地位を得たこと、承句は左遷されたこと、転句は讒言にあったこと、結句は皇帝の恩沢が失われたことをいうとする見方である。作者の経歴に鑑みれば、いずれの説も捨て難く併せて鑑賞したい末唐の一品です。

26 溪陰堂

溪陰堂　　蘇軾

白水滿時雙鷺下
綠槐高處一蟬吟
酒醒門外三竿日
臥看溪南十畝陰

白水満つる時雙鷺下り
綠槐高き處一蟬吟ず
酒醒めて門外三竿の日
臥して看る溪南十畝の陰

【通釈】
起句　（堂前の）清らかな水をたたえる溪流に二羽の鷺が舞い降り、
承句　（庭の）新緑のしたたるばかりの槐の樹に一匹の蝉が鳴いている。
転句　（目覚めると）昨夜の酔いも醒めて、門外の陽はすっかり高くのぼっているが、

結句　自分はまだ横になったまま、渓流の南の十畝ほどの農地の木陰を眺めている。

【語釈】

◉渓陰堂…真州（江蘇州）に在った范氏（人物不詳）の渓堂。◉白水…白い波をたてて流れる水。清らかな水。◉槐…えんじゅ。まめ科の落葉喬木。（参考）白水・槐は「白水過庭激、綠槐夾門植。」〔文選・潘岳詩〕の用例がある。◉三竿…陽が高くのぼったさま。竿を三本つないだほどの高さ。朝寝のたとえ。◉十畝…田畑の広さの称。一畝の十倍の広さ。周代六尺四方を歩とし、百歩を畝とした。秦以降は二百四十歩を畝とした。

（参考）十畝は「十畝之閒兮、桑者閑閑兮。」（十畝の畠があれば、桑を採り蚕を飼う人の心は閑(しずか)であるの意）〔詩經・魏風・十畝之閒〕を踏まえる。

【押韻】下平声 十二侵韻　　吟、陰、起句は踏み落とし。

【解説】

蘇軾（一〇三六―一一〇一）は北宋最高の詩人であり大文豪。二十二歳で進士及第し高級官僚の道を歩んだが、王安石（新法党）の政治改革に批判的であったため二度流刑を受け、政治家としては不遇の一生を終えた。

この詩は、元豊八年（一〇八五）蘇軾五十歳の作。その前、足かけ四年間流謫の地黄州（湖北省）で自ら耕作するという苦しい生活を送った後、元豊七年減刑され行動の自由が許されて常州（江蘇省）に移り、些かの土地を得てそこで余生を送るつもりになっていた。ところがこの年（元豊八年）三月皇帝神宗が崩じ哲宗（十歳）が即位し皇太后の攝政が始まるや政局が一変、政権が旧法党に移った。五月蘇軾は名誉を回復され登州（山東省）知事を拝命、更に十月中央に呼び戻され尚書礼部郎中となった。詩はその激動の最中の五月の頃、常州に近い真州での作とされている。起句・承句及び転句・結句をそれぞれ対句とし、田園の静かな風景の中に悠然と横臥する自らの姿を美しく由緒ある詩語により格調高く詠じ、激動する政局を見る作者の泰然とした心中を言外に示している傑作です。結句の「十畝陰」は詩経の「十畝之閒」を踏まえて、此の地で閑に余生を送るつもりでいたのだが……、の思いを匂わせています。

27 夏日

中庭日午橘花開
蜂蝶何知故故來
一陣南薰生殿角
亂飄香雪點蒼苔

夏日　　僧 善住

中庭 日午 橘花開き
蜂蝶 何にか知りて 故故として来る
一陣の 南薰 殿角に 生じ
香雪を 乱飄して 蒼苔に点ず

【通釈】

起句　心地よいま昼時、中庭に橘の花が咲いた。

承句　すると、どんなにして知るのか蜂や蝶が次ぎ次ぎとやって来る。

転句　ひとしきりの穏やかな南風が、寺院の屋根の一角から吹き下ろすと、

結句　香り高い雪のようなまっ白い花びらが乱れ飛んで、庭の青あおとした苔の上に点々と散らばってゆく。

【語釈】

◉中庭…なかにわ。◉日午…まひる。日中。◉橘…漢名の橘は狭義ではみかんの仲間のぽんかんを意味する。我が国では日本原産のたちばなに橘をあてる。いずれも花は香りが高い。◉何…なに。どんな。◉故故…しばしば。たびたび。◉一陣…風や雨などのひとしきり。◉南薫…①古代の聖天子舜（しゅん）が天下が治まり民が富むことを願って作ったとする詩「南風」をいう。〔孔子家語、辯樂解〕昔者、舜弾五絃琴、造南風之詩、其詩曰、南風之薫兮、可以解吾民之慍〈いかり〉。南風之時兮、可以阜〈ゆたかにす〉吾民之財兮……。②転じて南風。初夏の風。温和で生物を育てる風をいう。◉殿角…寺院の屋根のかど。◉亂飄…みだれひるがえす。◉香雪…香りのある雪。白い花の形容。◉蒼苔…青あおとした苔。

【押韻】上平声 十灰韻　　開、來、苔。

【解説】

僧善住（？―？）は元の僧。字は無住。別号は雲屋。呉郡の報恩寺に住み詩を善くした。この詩は初夏の寺院の中庭の、のどかで平和な風景を詠んだ気品ある一品として鑑賞に堪える佳作であるるが、当時の政治情勢に鑑みるると、詩は単なる情景描写ではないようにみえる。

「南薫」は聖天子舜の故事を含み、「香雪」は善政を「青苔」は人民を思わしめ、善政を渇望する民の思いを、収奪を専らにする政権に伝えんとする切実な諷刺の詩としても鑑賞することが出来る逸品です。